

大内・飯野・阿部氏編「湖白庵諸九尼全集」

白石, 悌三

<https://doi.org/10.15017/12322>

出版情報：語文研究. 12, pp.63-66, 1961-04-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『湖白庵諸九尼全集』紹介

白石梯 三

大内初夫、飯野松子、阿部王樹編、昭和三十五年九月五日発行、五百部限定、箱入B六版、五百頁。

巻頭に「謹んで本書を文学博士杉浦正一郎先生の御霊前に捧げ奉る」の献詞がある。思えば昭和三十一年の暮、折から私が詰めていた九州大学附属病院の杉浦先生の病室を一人の婦人が訪れた。郷土の女流俳人諸九尼についていろ／＼調べたいので御指導を願いたいという事であった。その頃既に死の病に臥しておられた先生は愛弟子の大内初夫氏を紹介され、その時からその婦人ほかならぬ飯野松子氏と大内氏による諸九尼の研究は始った。当時大内氏は、杉浦先生の右腕となつて「九州蕉門俳諧史概説」（文学研究第四十九輯）の素稿をまとめられ（大内氏の鹿児島大学文理学部文科報告第九号「九州俳諧史の研究」はその続篇）、中西啓氏等と共に『向井去来』の大著を完成されるなど、既に九州俳諧史の研究では右に出る者のない新進であつた。一方阿部王樹氏は、氏の俳画展に際して感興を催された杉浦先生が、新聞に紹介の筆をとられたのが縁で以来

親しくされていたと聞く。杉浦先生が九州に御赴任以来努めて鋳を入れ蒔かれた九州俳諧史研究の種が、かくて生前親炙された人々によつて没後に又ひとつの結実をみた事は、この地にあつて同学に志す後進の喜びとするところでもある。早速に目次を示そう。

序 川島 つゆ

序 向野 丈夫

諸言

解題

凡例

秋風の記

その行脚

湖白庵集

諸九尼句集

諸九尼続発句集、付、諸九尼発句拾遺

諸九尼書簡集

窓の春集

朱白集

諸九尼秀句の鑑賞

湖白庵諸九尼の生涯

跋

阿部 王樹

大内 初夫

阿部 王樹

尚、表紙裏見返しには「六誹夢中図」（梅子画）、裏表紙裏見返しには「秋風の記足跡図」（飯野松子作）、装幀、挿絵は阿部王樹氏の筆である。

阿部氏には私は面識がない。但し氏の俳画が絶妙の境にある事は夙に見聞していたし、この出版に当って大内、飯野の両氏をバックアップして欠く事のできない大きな存在であった事を聞いている。

本書には滋味掬すべき氏の挿絵が「秋風の記」に十八葉はさまれていて楽しいが、その後出版祝賀の席上、飲むほどに酔うほどに描かれたという色紙の数々を拝見してからは、あの原画の俳味が、ちっぽげな印刷からは到底味わえないのをもどかしく思った。もう少し贅沢な印刷で、その時はいっそ「諸九尼秀句の鑑賞」も彩管でなされたらと欲が出たりした。ともあれ、本書が高い資料価値を有しなから学術出版にありがちな無味乾燥なものに終らず、関秀俳人の佳吟を伝えるにふさわしい装いで世に出た事は、ひとえに氏の功績である。それ程に本書の装幀は好ましい。

さて目次にもどって、「秋風の記」「諸九尼句集」「諸九尼続発句集」はかつて古俳書文庫第式拾篇に翻刻された事があるが、その「秋風記」は上巻紀行のみであってその旨をことわっていないので、一冊本と誤られ出版年時推定の誤謬と共に俳諧大辞典にも襲われ

た。又「諸九尼句集」「諸九尼続発句集」も、編者竹岡、其両が竹雨、其雨と誤られて俳諧大辞典等に襲われたほか誤脱が甚しく、それらの欠点が今回の翻刻で改められたのは喜ばしい。概して俳書の翻刻は昭和初年の俳文学大系完結まででストップしており、その往時の翻刻が今日では全幅の信頼をおけなくなっている折から、このように個人の全集の形ででもそれが果されるのはありがたい。従来も地方からいわゆる郷土史家によつて同様の出版は少なからずなされてはいるが、その多くが自慰的なもので、出典を明示しなかつたり原典に忠実でなかつたりして、折角ながら研究者の役には立たないものがあつた。そのような中で本書は、編著者に人を得て手堅い出来を示している。

以上の三書以外は、古俳書文庫の解説に「別に浮風追善』その行脚」と云うのがあるそうであるがまだ見ない」とされていたものをはじめ、皆はじめて翻刻されるものばかりである。しかも当初の計画にはなかつた夫浮風編の「窓の春集」「朱白集」が追加されて、字義通り雁鳩全集の名に恥じないものとなつたのは、諸九の前号である雁鳩の発見者大内助教の学術的発想であろうか、若き未亡人と承る飯野女史のこの尼に賭けた切なる祈りであつたらうか、それとも伝来の唐墨「雁鳩」の奇しき縁にひかれる王樹翁の粋のはからいであろうか、いずれにもせよ諸九尼もって銘すべしである。校訂は「秋風の記」上巻が飯野氏でその他は大内氏となつているが、三校まで原本の写真と首つびきで良心的にされていた大内氏の御苦勞を多としたい。しかし翻刻の仕事とは致し方のないもので、添えられた裏表にわたる正誤表の他にも尚二三のミスプリントが目につく。

「諸九尼発句拾遺」「諸九尼書簡集」は本全集のために大内氏が新しく編まれたもので、前者は古俳書文庫解説の補遺八句を吸収して百五十八句という博搜の努力を重ねておられる。その後九大の研究室に入った短冊に「散ものは空にこそあれ水仙 花諸九」という逸句があったりして、時間をかければまだぼつ／＼と増補もできようが大勢はますます動かない所であろう。後者はかつて「俳人諸九尼の手紙並びに解説」(佐賀竜谷学会紀要五号)に翻刻され「俳人諸九尼の生涯——なみ女の頃」(語文研究六・七号)の骨となつた問題の「諸九尼の文」を含んで、稀覯のものばかりである。そのかみ風律の「小ばなし」の記事を報ぜられて沼波瓊音氏が、喜びのあまり「芭蕉様、ようこそ妾を持って下すつた」と叫んだという語り草があるが、大内氏が研究の途上この「諸九尼の文」をみつけた時の興奮も似たようなものがあつた。「駈落ですよ、駈落よ」そして流れる如くに「なみ女の頃」が書かれた。「実はそこに浮風死別後の廿年間の残生を、しゃむに俳諧に生きねばならなかつた諸九尼の秘密があるのだ」と説きおこす大内氏の筆はまことに楽しそうなのがあつた。

本書の二八九頁「窓の春集」以下が追加などもあつたため九ポ二段組になつてゐるのは惜しいが、又そのために五百頁にしては驚くほど充実した内容になつてゐる。殊に巻末の「湖白庵諸九尼の生涯」は先の二論文に加うる「湖白庵諸九尼」(国語文二十六卷十二号)「俳人諸九尼の前号雌鳩について」(連歌俳諧研究十九号)等の「旧稿をその後の資料によつて加筆増補したもの」で、参考一として諸九尼一座の連句一覽、参考二として追善俳諧二卷、参考三と

して追善集「懐旧の発句」を翻刻し、諸九尼略年譜を附した堂々七十五頁にわたる力作であつて、本書の価値を一段と高めてゐる。「向井去来」以後、「俳人四方郎宋拙の研究」(佐賀竜谷学会紀要第四号)「中村西国伝」(日田文化財委員会発行)「志太野坡」(俳句講座第三卷)「九州の古俳人」(冬野昭和三十三年)と一連をなす俳人評伝のひとつであり、いつもながらの緻密な考証と叙述は自家薬籠中の感がある。諸九尼の伝記研究は氏の初稿が出る迄は、前記古俳書文庫に「三書解題を兼ねて」記された田中紫江氏の「諸九尼考」が簡単ながらほとんど唯一のもので、出世説など俳諧大辞典に至る迄これを踏襲していた。しかしなにもさま大正十四年の稿で、近年めざましく進んだ研究の段階から顧ればいろ／＼不満な点が多かつた。大内氏の新研究は、尾仲家出世説を改め、本名を確認し、前半生の秘密を明かにし、前号雌鳩の発見によつて空白を埋め、岡崎湖白庵の焼失に関する時代錯誤を改める等大巾に書き直し、その他多くの資料を駆使して田中氏のものとは質量共に比較にならない厚みをみせてゐる。氏がライフワークとして取り組んでおられる「九州俳諧史」の一角だけにさすがと思わせられる。例えば本書の二三九頁「諸九尼統発句集」の巻末にいわゆる本屋の広告、額田正三郎板行の蕉門野坡流俳諧目録まで翻刻してあるのは、氏の意図する所があるかであろう。氏をはじめとする関係者の博搜にもかゝらず、この目録の中「向日品・初陽炎・竹の光・宿の花(上)・顔くらへ・養生浜・小さかつき・極まつ葉・高津野翁二十五回・十日山姥・秋のつふり・まくら時雨・其郭公・珠の時雨・貫ひ梅・秋の燕・枯野・友・白弊青弊(上)・鳥のはやし・松の蟬・此葉

集・梅とまつ・浦の春・野坡吟艸後篇」はいまだに一冊も発見できないでいる。いずれも九州の俳書であるから、本誌の会員読者のお宅やお知り合いの蔵の中からでももしや見つかった時には、大内氏なり、九大国文の研究室になり御一報いたゞければこれにすぐる幸せはないであろう。楽屋落ちめくが、前掲の俳書に限らず地方俳諧史の研究は、そういった多くの方々の御協力を得なければならぬ、個人の努力の限界に來ている。

變な所で横道にそれたが、大内氏の緻密な考証は恩師譲りで定評がある。それが今回単なる資料の羅列に終る事なく、その中から生身の人間を掘りおこしたものは、氏が自らの人生を自ら拓いたこのパッション・ネイトな尼にいつしかはれこんでいたという一事にはかならない。かくて大内氏によつて完全な迄に描かれたこの尼の生涯に、しかし大内氏にもまして誰よりも魅せられたのは飯野氏であつたに違いない。氏の本書における仕事は「秋風の記」上巻の校訂と脚註と足跡図にすぎない。脚註といつても大体古俳書文庫のそれを基として手を加えた程度で、もとより多くを付け加えてはあるが簡単なものである。引用にやゝ適切さを欠くのががあるがそんな事はどうでもよいだろう。大内氏に比すれば氏はおそらく素人の研究者かもしれない。しかし本書の実現のために一番情熱を燃やしたのも氏であつた事は、一諸に仕事をされた大内氏が認めておられる。私どもがかつて直方の氏を訪れた際に聞いたのは、つきる所を知らない諸九尼への傾倒であつた。氏は諸九尼の顕彰に生きがいを見出し、諸九尼はのろけに共感の耳を傾けてくれる同性を後の世に持った。これこそ邂逅と呼ぶべきであろうか。氏は、炎天下を資金集めに奔走した

始めから徹夜で出版祝賀の日を迎える迄の苦しい奮闘を、一喜一憂をそのまゝに語り続けた。そのおしゃべりを聞きながら、私は彼女の中に諸九尼が生きているのを知つた。最後に氏は「何もかもが楽しい勉強でした」と結ぶ。私は氏への義務としてもこゝでPRしなくてはなるまい。本書は非買品ではあるが「直方市山部四八五・飯野松子様」宛申し込めば頒けてもらえる。

さて欲をいえばきりが無い。地方俳壇と中央俳壇の交渉なども蝶夢との関係で大内氏にもつと聞きたいし、同じ頃の九州の他門との関係で野坡門経営の実態ももつと聞きたい。それに諸九尼のすぐれたる所以を実作にそつて時代の俳風の中に浮き彫りにしてほしい気もする。歴史的な眼による鑑賞である。でないといひいきのひき倒しになりかねないところがある。しかしそれは贅沢というもので、これだけ完備した基礎資料が与えられれば、あとは読者の責任においてなされるべきであろう。本書は、大内氏の学問的良心と、飯野氏の異常な熱意と、阿部氏の豊かな趣味のかなえに立脚し、かの尼の俳諧と人生とその晩年をはぐくんだ郷土とへ傾けられた編者各々の愛情と努力が、大きく実を結んだものとして高く評価されるべきである。この地味な計画を支えた地元としても自慢してよいものがある。きあがつた。げに故郷を持つ詩人は幸せである。